

令和5年度第3回 伊那市総合教育会議会議録

- ◎招集年月日 令和5年12月15日（金）
◎開催日時 令和5年12月22日（金） 午後3時30分～午後5時
◎場 所 伊那市役所 庁議室
◎出席者 白鳥市長、笠原教育長、北原職務代理者、田畑委員、原田委員、黒河内委員
◎欠席者 なし
◎出席職員 三澤教育次長、宮下学校教育課長、北林子ども相談室長、矢澤生涯学習課長、早川市誌編さん室長、小島社会教育指導員、福與指導主事、酒井指導主事、伊藤教育総務係長

1 開 会

教育次長

定刻となりましたので、ただいまから第3回目の総合教育会議を開会いたします。はじめに白鳥市長からご挨拶をいただきます。

2 市長あいさつ

市長

10年に1度といわれる寒波が入ってきているということでもあります。いよいよ今年もあと来週でおしまいということで、この1年間、教育委員の皆さんには様々な面で伊那市の教育行政に対して、ご支援いただいたことを心から感謝申し上げます。

学校ではインフルエンザやコロナが流行っており、まだまだ気を抜けないわけですが、少しずつ日常に戻るかなという状況であります。

伊那市総合教育会議ということですが、今回は10月の8日から15日まで先進的な教育を行っておりますフィンランドで視察に行っていました。行政だけではなく、民間の皆さんを交えた14名ということで、教育委員会からも田畑委員さんそれから黒河内委員さんそして指導主事の酒井さんに伊藤さんが参加し、本当に厳しいスケジュールの中でしっかりと学んできたところであります。

視察の中では保育園、小中一貫校、東フィンランド大学、リベリア林業専門学校、あるいは図書館を訪問したり、先生、また学生職員の皆さんとも意見交換をしたりしてきました。後ほど報告をさせていただくわけではありますが、フィンランド教育はどうして優れているのかということ垣間見てきたつもりでありますので、そうしたことが伊那市の教育の現場でも少しでも展開できればと思っていますところであります。

今日そうした報告を兼ねての意見交換会ということでお願いするわけでもありますので、ぜひまた皆さんのご意見を聞きながら、また質問などいただければありがたいと思いますので、お願いいたします。

教育次長

ありがとうございました。続いて教育長からご挨拶をお願いします。

教育長

市長のご挨拶をいただきまして、その通りかなと思い伺っております。

今回のフィンランド訪問では、林業に加えて教育をもう一つの柱としていただけたことは、本当にありがたかったなと思っています。

12月の定例議会でも多くの議員さんがフィンランド訪問の成果と今後について取り上げておら

れます。ご質問をお聞きしながら考えたこと、そのことを若干触れさせていただいたものもありますが、伊那市の学校や教育委員会が今まで取り組んできているものを整理し直す非常に良い機会、観点をいただいたと思います。また今後こうした取り組みを期待したいというようなものを考えていく、そのきっかけを与えていただけたと思っています。

教育委員会から参加された伊藤補佐、酒井指導主事には事前に触れること実際に現場の教育に携わっておられる方の姿を見て感じることで、そうしたことを大事にさせていただきたいとそんなお願いをしたところでございます。そうしたご発言をいただければ嬉しいなと思います。

本日もどうぞよろしく申し上げます。

教育次長

ありがとうございました。それでは協議事項に入りたいと思います。

ここからは市長の進行でお願いいたします。

4 協議テーマ 「伊那市におけるフィンランド教育について」

(1) フィンランド視察報告及び所感について

白鳥市長

フィンランド視察の報告を兼ねて所感を皆さんにお伝えをしていただきたいと思います。

12月議会で4人の議員の方が質問されたように非常に高い関心があり、また市民の皆さんからもフィンランドの話をぜひ聞かせてほしいという話があったり、職員からもそういう声があったりします。来年1月24日には市民の皆さんを含めた報告会を企画していますので、ほかの参加者からもお話を聞いていただければと思います。

最初に私の方からお話しします。日程は行程表のとおりですが、商工会議所から前会頭の川上さんと副会頭の栗原さんの2人に参加してもらいました。森林・林業に関しては森林組合から池亀さん、ラーチアンドパインという林業関係の会社から杉本さん、ミドリナ委員会から平賀さん、浜田さん、長野県林務部から3名の方が参加され、時には林業関係と教育関係の2班に別れたりしながら見てきました。

前回、令和元年に行ったときにも感じたのですが、フィンランドは資源が非常に乏しい国です。唯一ある資源は水と森林です。森林資源を非常に大事に使って国が成り立っているという印象と、水を使って内水面の漁業や水力発電、こうしたことでエネルギーを賄っている感じでした。国土面積は日本と同じぐらいですけれども人口は550万で小さい国ですが、世界でも注目をされている国であることに間違いありませんので、その理由は何かということです。幸福度は世界で一番、森林事業が盛ん、森林から新しいものを見つけて仕立て上げていく。特に北カルヤラ県と伊那市が令和元年に覚書を交わして、その北カルヤラ県のヨエンスー市を中心に見たんですけど、ここはヨーロッパの森の首都という言い方をされていまして、7万7000人ぐらいの市ですけれども、1万人ほどの学生が学んだり研究をしたりしています。幸福度は世界一、教育も世界最高水準、もヨーロッパの森林の首都と言われるぐらいの位置づけであり、子どもたちにはムーミンやサンタクロースに馴染みの深い国であります。

そうした国を作ってきた背景はどうかということも非常に興味はあります。また、無いものから産業は生まれないと思いますが、国が有るものをしっかりと活用して暮らしているという感じがしました。どうして世界一の教育水準なのかについて教室は少人数で20人から25人ぐらいの教室で、全員が授業を理解している。授業が進んでいく中でわからないことも当然出てくる。算数にしても、国語にしても、理科にしても、わからない子がいるとその子は別の教室に行って他の先生がわかるまで教えてくれる、しっかりと理解した段階で元の教室に戻ってきて、次のステップに行くということなので、理解しないまま進むような教育をしていない。それがまず一つ。

次に、子どもたちは詰め込み式ではない授業の中で「学ぶことを学ぶ」ということです。これは一生、学ぶということですが、人にとって一番大事な学びは何かということをお小生のうちからきちんと身に付けて成長していく、卒業後も学ぶという姿勢を持ち続けるということです。

その源泉は、森、森林です。森から学ぶ、森とともに生きるというお国柄で、学生にも大人にもお年寄りにも話を聞くと10人が10人、100人が100人、森を尊敬する、森林を敬う、そんなことを必ず言います。森によって自分たちは生かされていることを子どもたちもわかっているのです、そうしたことが一番底流にあって、小学校4、5年生ぐらいには自分で焚火ができる、あるいは包丁を研ぐことができる、ミシンを使って縫い物ができる、オーブンを使って調理ができるなど、生活の上で必要なことはきちんと学校でも教えていく、家庭でも教えていく。私達も小学校、中学校の頃はトンカチで椅子を作ったり、カンナで削ったり、裁縫もしたりしたのですが、今の学校でなかなかそういったところまでいかない。フィンランドでは成長過程で必ずそういうことをきちんと身につける。しかも、危ないからしないのではなくて、危ないものはどうやって危険を回避しながら使うのか、例えば自動カンナがありました。小学校、中学校ではきちんと使えるように工作室があり、本当に職人の工房かなと思うようなものが、普通に置いてあって、子どもたちがそれで学んでいる。

椅子を作ったとしても、その椅子のデザインをどうするかという議論が必ずあります。ただ機能だけあればいいのではなくて、デザインのことも必ず一緒に学んでいく、その色についても同じです。デザインについてどう解釈をしたらいいのかというようなことですが、ヘイナバーラの学校行ったときに、学校の教室のカーテンは、あの有名なマリメッコでした。マリメッコで囲まれている。学校という教育の現場においても、デザインというのは非常に重視されているということでした。

子どもたちを甘やかすことをしないということで、訪問した小中一貫校は森の中にあるのですが、半径5km以内に暮らしている子どもたちは自分で歩いてください、夏だったら自転車、冬はスキーもOKということで、変な甘えはない。また、行った人がみんな驚いたのですが、始業前には学校へ入ってはいけない、外で遊びなさいということで、子どもたちが群れて遊ぶ感じで、外で遊んでいました。みぞれ交じりの雪がしっかり降っている校庭では、みんな遊んでいて、チャイムが鳴ったら入ってきました。真冬でもマイナス20度以下にならないと入ってはいけないということが徹底されていました。

先生たちは非常に前向きに授業をしていて、誇りを持ってプライドを持って授業をしている感じでした。先生の社会的地位は、日本で言えば弁護士や医者と同じようなスタンスです。大学院を卒業しないと先生にはなれないし、しっかり勉強して来ないと先生になれない、その代わりに休みの時間や休日はしっかり休みを取る。校長先生は教師が働きやすい環境を作るため、学校に必要な先生を探してきて、そこで働いてもらうことも仕事と言っていました。先生は3年で交代ではなく、長い人はずっといるし、そのあたりは校長の裁量であり、非常に大きいです。

教育は国を上げて取り組んでいることはひしひしと感じるし、もちろん授業料は無料、給食も無料、大学まで無料であり、学ぶ機会を均等に国民に与えている。日本のように勉強するために塾に行くこともなく、皆が学校で学んでいる。宿題もなく、学校で学んでいけば覚えられるということで、子どもたちの話を聞いたり、様子を聞いたり、国そのものをもう見ても非常に成熟した国でした。

印象として、高遠の実学、進徳館の教え、教育はやっぱり実学だということ、フィンランドは小学校から大学、さらに社会人になっても学び直しがしっかりできるようにしていること、記憶力を求めているものではなく「私は社会にとって何ができるのか」をきちんと自覚し、そのために学び実践している人が、社会では一番大事にされるべき人だという話を聞きました。

伊那市でも共通項がいっぱいありますので、しっかりと棚卸をして、そのことはそのこととして伸ばしていくし、また導入できるところについても考えていった方がいいし、教育には予算を

惜しむなと言っていますので、そうしたところについても進めていくことが大事と思いました。私の報告は以上としたいと思います。

田畑委員

市長から報告いただいたことは、まさにその通りだと感じています。私からは個人的に感じた感覚や、現地の方から直接お聞きして感じたことを話したいと思います。

大学生と話をする中で「この国の権利と義務は何ですか。」と聞くと、「フィンランドは教育と福祉に関しては確実に国民に権利として与えてくれる国です。ここまでしてもらっているのだから、その責任として納税と国防義務も逃れられないものだと思います。今の環境を次の世代に残すためにも、納税と国防について着実に責任を果たします。」ということでした。それを聞いたときに、日本史の歴史を振り返り、日本もかつてそれぞれの武将によって分断されていて、地域が県境を境にして信濃国などにわかれており、いつ隣から攻められるかわからない中で、いかに自分たちのエリアから人物を輩出し、また経済的にも富んでいくか、ということが大きかった時代が頭に浮かびました。フィンランドは日本と環境が異なり、独自の正攻法を育みながら来ている国だと感じました。

学生になりたい職業を尋ねると教員を目指す学生が多く、人を教え導くことをやりたいということでした。2番目に人気の職業は何か聞くと職人ということでした。技術を身につけて、自分の技術で社会に貢献するというので、かつての日本もそういう時代があったなと感じました。また、何のために勉強するのか質問すると、「日本では幸せになるために勉強するのではないのですか？」と逆に質問されました。日本の勉強は中学では成績優秀になって高校に入る、高校では大学に入るために、大学では会社に就職するために勉強する、一定の評価を受けて次のステージに進むという目的以外に、子どもたちが真の目的を考えていない。学びを学ぶというスタンスは日本の人材輩出の仕組みと全く違う形であると感じ、「一番いい学校はどんな学校ですか。」尋ねると、「住んでいるところに近い学校」という答えであり、「この国には良い学校、悪い学校はありません。」ということでした。大学は地方にある大学でも都市にある大学でも一定基準を達成することで評価は一緒となり、そこの大学を出たから良いということはない。国策として確立した流れの中で、国としての教育水準を平等に提供することに徹していると感じました。

教育産業について尋ねると「教育産業とは何ですか？」と逆に聞かれ、「塾とか試験の点を取るために塾へ通ったりするじゃないですか。」と答えると、「そういうことはないです。」ということでした。日本の高校生は遊ぶ時間がないほど宿題があるが、フィンランドには基本的に宿題はない。学校で勉強して、午後4時半になったら帰り、クラブ活動やりたければ自分でスポーツクラブに入る。教員はいかに国の求める水準のものを、平等に理解することにエネルギーをかけて、いかにわかりやすく授業するかということに特化している。いじめや不登校は、最終的には親の責任で学校の先生の責任にはしない。不登校になれば通信教育や、親が教員の代わりをするを条件に自宅学習も認めている。

伊那市で何を取り入れられるのかについては、国の成り立ち、あり方も違い、難しさがあると感じました。生涯学習には大きな違いがあり、かつて昭和の復興期には、学びに飢えていたところもあって、社会人が地域で何かを学ぶため、公民館に集ってみんなの歌を勉強する、詩吟を勉強する、点字を勉強するなど、社会的に学ぶ機会がありました。今、残念ながら狐島区ではかつて15近くあったクラブは今3つしか残っていません。みんな80歳過ぎて卒業しました。地域の公民館はもっと違う切り口で、社会人が実学を学び直しができるような仕組み、年齢に関係なく学べる場所、世代に関係なく学び直しができる場所、そうしたコンセプト、スタンスでの学びができ、もう少し実学的な講座があったり、社会人の学び直しができる講座が昼夜で展開するなど、生涯学習には自由度がある。フィンランドでは、図書館が教育をカバーする場となっていると感じました。以上です。

黒河内委員

小中学校の教育、それからフィンランド公共図書館は非常に有名だということを事前に聞いていたので、社会人がどう学んでいくかということにも関心があり、実際に素晴らしい図書館を訪問しました。

小学校から学ぶ中で自分自身を振り返ると、中学校では高校受験を突破するために5教科で良い点数を取る、高校に入ると大学受験のためにやっていたと思います。大学では、その先生が実施した過去のテスト問題があって、傾向と対策を掴んで試験に合格するような、与えられた枠の中で準備してテストを受ける、テストが終わったら大体忘れている。もちろん卒業論文を書くとなるとその手法は使えず、自分でも本を探して読んで、ギリギリパスした感じです。大学院ともなるとその手も通用せず、他人がやっていない分野、自分が興味のある分野を徹底的に深めないと修士課程の学位がもらえないと思います。私は自分自身、海外の大学院ではそこまでのレベルのことはできませんでしたが、そういう壁があると感じました。

フィンランドでの学びで行われていることは、少なくとも5教科で500点を目指すという教育ではなく、子どもが森の生活の中で疑問に思ったことをその子が学びたいところまで学ぶというようなことは、少なくとも日本よりもしやすい環境があるし、興味を持った分野は一生懸命勉強するかもしれない、興味を持たなかったことについては全然成績は良くないかもしれない。小学校や中学校では隣の人と同じで成績をつけるということではなく、その子が学びたいことをどこまで高められるかを先生が指導されている。先生たちはそれぞれの大学院で教育を受けているので、そこはしっかりやっている。フィンランドに行くまで、なぜ大学院まで行かないと先生になれないのかという点が疑問でした。大学院では、関心を持ったことは徹底的に深める、それができるといことです。一つの分野を深めることは確かに身につくだろうし、それは即ち学ぶことを学ぶ、学び方を習得するということだと思います。それができていれば、確かに子育てが終わって時間がある、退職した後も図書館に行ってみよう、自分で興味を持ったことを自分の力で学ぶ力が身に付いているし、もちろんサポートもあるし、仕組みもある。

一方、日本の社会人は、大学出てから就職して一生懸命やって退職したときに、さあ、図書館にはいろいろ本があるよと言われて行って見て、好きなことを勉強して良いと言われると困ってしまうと思います。

伊那市を含めて、生涯学習は何か趣味的なものになりがちで、著名な先生が来て楽しませてくれる講座もあるが、個人が自分の興味を深めるような学びはあまりないと思います。どうしたら良いかについては簡単ではないのですが、伊那市には伊那小学校というフィンランドに非常に近い学校があり、子どもが自分で興味を持ったテーマをなるべく深め、時間の制限はあると思いますがチャイムがなく、通知表もないという取り組みを長年されてきています。フィンランド的な教育の良さを取り入れようという議論をするときには、もしかしたら伊那小で行われていることを他の学校や、中学校、高校でもできないだろうかという議論に置き換えると、非常に具体的な議論ができるようになると思います。フィンランドはあまりにも文化的な違いがあり、制度も違い、5教科で500点を目指す教育と違い、それをいきなり無くすわけにもいかないことは承知していますので、そういう意味では伊那小学校は伊那市にとっても財産であり、どのように展開できるかという議論があってもいいと思います。

もう一つ、森での学びについて、今回、教育関係者と林業関係者との関係も深くなりましたし、森から学ぶことってたくさんあるだろうと思うので、先生方は大変忙しい中で、そういうプログラムを外部でつくり、先生も子どもたちも一緒に森連れて行ってもらって、共に学ぶことができると良いと思いました。

学ぶ手法を学ぶための学び方を身につけるということが、いかに大事かということを感じさせられた視察でした。以上です。

酒井指導主事

一番感じたのは、先生方が確かにプライドを持って教育に当たっている、大学院を出ているし、自分が小さい頃からやっぱり学び方をしっかり学んで身につけているという自信、プライド、そういうところを感じました。フィンランドは決して資源の豊かなところではないし、産業もいろいろな産業があるわけでもない中で、人を育てるところをすごく大事に考えていると感じました。

全ての学校がそうだということではありませんが、ヘイナバーラ小中学校は一貫校であり、その中で小学生から中学生までと一緒に生活をしている。もちろん授業はそれぞれの学年ごとですが、外で遊ぶときには様々な年齢の子たちが一緒に遊んでいるところは素敵だなと感じました。中学生が小学生に声をかけたり、あるいは小学生が中学生を慕って係わったりしていく、小学校の中には日本でいうと保育園の年長さんたちがいる、プレスクールという制度だそうですが、そこで小学校の学校生活に馴染めていける制度がありました。交流としてイベント的に行うということではなく、日頃から子どもたちの姿を見ながら、あるいは子どもたちが小さい子どもたちの姿を見ながら一緒に生活をしています。

保育園では園長の言葉がすごく印象に残っています。雪交じりの中で、子どもたちは外で一生懸命遊んでいます。子どもたちにはいろいろ言わなくても、森の中での遊び、その中でいろいろなことを学ぶ、本当にそうだと感じました。ともすると危ないものをできるだけ排除してからというようなこともあります。そういうものも含めて遊びの中、体験の中で学ぶところが大きいと感じました。保育園児や小学校低学年の頃はそういう環境を整えていくのは当然必要なことだと思いますが、遊びを通して学ぶ、日本ではどうしても1人遊びが多いのですが、人と関わりながら遊ぶ体験をさせてあげられたら良いと感じました。今はそういう環境はありませんので、すぐということにはできませんが、可能であれば、そこに地域の大人や高齢者、そういう人たちが一緒になって生活すること、それは大家族の中ではできていたことですが、今は非常に少ないので、地域一体となって地域の大家族のような雰囲気の中で学ぶ、体験できたらいいなと感じました。

自分の小さい頃、山に入って勝手に木を切って怒られたこともありましたが、その中で友達との付き合いや、これは駄目だけれどもこういう時にはこうすれば良いということ、体験の中で学んだことがたくさんあると感じています。そういう意味では自然環境に恵まれている地域ですので、例えば伊那西小学校や、西箕輪小中と保育園では森を使って一緒に活動ということもされているようです。無理にやっってくださいというのは今の段階では難しいと思うので、子どもの育ちがあるということ発信しながら、それを全市的に広げていけると良いなと感じています。それが可能性のあるエリアが市内にはいくつもあると思います。

また、フィンランドの子どもたちとの交流もぜひして欲しいと思っています。既に伊那小学校の5年生のクラスがやりたいということで動き出しています。ある程度は、学校同士のメールでのやり取りをしながら、リモートで交流を深めたい、そのクラスだけではなくて学年に広げてやっていきたい、そんな希望もお聞きしています。

日本での教育の目的は、目先の目的、例えばテストで点をとって次のステップへ進むという意識が、子ども、保護者も、社会全体にもあります。自分がこれからどう生きて、自分の幸せや周りの幸せ、地域の幸せも考えていく、そんな子どもを育てていきたいと思っています。まずは、身近な地域の中で遊び、体験し、学んで、自分たちの地域を好きになって欲しいと思います。おそらく一度は外に出ると思いますが、ここへ戻ってきて、自分の幸せ、地域の幸せを育む、そのように育てたいなど、今回の視察で感じました。以上です。

伊藤課長補佐

参加者の皆さんの気づき、今後の取組について意見交換しましたので、その意見を報告します。

1つ目は教育プログラム提供です。教育コーディネーターの配置ということで、森と学び、そうしたものに係わる人員を配置したらどうかというものです。例えば地域おこし協力隊を配置して進めていくことも考えられます。教員向けの教室については、教員の方も森に行って研修を受ける機会を設けたらどうかというものです。オンラインでの交流は、酒井先生からの話にもありましたけれども具体的な話が進んでいます。長期的にはインターンシップ。日本語を学んでいる学生も結構いらっしやいまして、実際に交流をしまいいりました。日本に来て1年ほど留学して帰るといふこともあるようですので、そういったことを目指していくことができれば良いとの意見も出ています。

2つ目は森と学びのセンターです。森と学びは親和性が高く、実際に学校での取り組みも多いのではということで、今回各学校へ調査を行っています。森と学びのメッカ、ブランディング、子どもたちが森で学ぶ取り組みを進めたらどうかというもので、森と学びに関するプログラムを開発し提供していったらどうかというものです。

3つ目の保小中連携は、森に係り小中学校の連携、それから森を活用している保育園もありますので、そういったところの連携もあるでしょうし、例えば長谷地区での取組も期待したいとの意見がありました。

4つ目は教育とは関係がないのですが、林業班の方から組合員の所有のデータのオープン化について、フィンランドでは森林組合の組合員所有の山を通販で買い物するような形で売買できる仕組みがあります。現在、日本ではそうした仕組みがありませんが、まずは森林所有者のデータ化を進めたらどうかということです。

5つ目は、現地でお聞きした起業の事例の中にキノコでビジネスを始められた方がおり、その方がこの度、長野県に来られ、伊那市にも来ていただいて、ビジネスの話を一緒にいただきました。

最後に今後の対応について、フィンランドの報告会をしっかりとやっていきたいということで、12月26日に関係者で打ち合わせを行い、1月24日に報告会を実施する予定です。よろしくお願いいたします。以上です。

市長

はい。最後の報告については、私達がこれから検討していかなければいけないことをまとめてありますので、ぜひ形にしたいと思っています。現状はどうかということをよく調べた上で、できるところからやっていくことになると思います。

伊那小学校の子どもたちがオンラインで話をしたり交流したりするということは非常にいいことだと思います。これはすぐにできるだろうし、先生方も向こうの先生たちとの交流をできると思います。やり取りしている中で、先生がこっちに来る、こっちの先生は向こうに行って現場で学ぶ、そういったこともありだと思います。

「森と学びのセンター」は、こうしたものがあることによって、伊那のブランドが明確になってくると思います。先生たちに森や自然、自然科学をもう一度勉強してくださいと言っても、無理な話だと思います。興味のある人はできるでしょうが、先生たちも子どもたちもその両方を教えられるインタープリターのような人を常において、生徒たちと先生が森に行ってこんなことをしたいと言えば、森に入るときに身支度や危険なことなど教えながら、森は楽しい、そうしたことを伝えられるような、そうした組織があってもいいと感じています。子どもの成長に合わせて、森だけでなく里山でも、何かプログラムができれば面白いと思います。

交流については、行きました、視察しました、向こうから来ました、交流しました、それを何年繰り返しても答えはでてこないの、どうやったら答えが出るのかというところを議論して進めていくべきだと思います。今回、来ていただいた化粧品の関係の方は、向こうの森林の中から新しい成分を抽出して、化粧品の素を作って、それを大手化粧品会社に売りたいという話でした。

フィンランドの樹種は非常に単一で、100本の木があるとする90本から97本はアカマツ、シラカバ、トウヒで、その他の樹種はほとんどないです。日本に来ると、2600種類、たくさんの種類の木があります。新しいものをかなり発見できると思います。酒粕の話もしています。フィンランドはビジネスに結び付くようなことを求めており、単に交流するだけでは意味がなく結果を出しましょうということですので、それを前提とした進め方をしたいと思います。向こうの先生と教育関係者のやり取りの窓口も具体的に話があります。やると決めればすぐにできると思います。皆さんから、質問や意見を出してもらえればと思います。いかがですか。

教育長

芽生え始めている伊那小学校の交流は、どんな経緯から具体的にになっているのですか。

指導主事

一緒に渡航した方から、小学校の先生から個人的に相談があったようで、具体的にはフィンランドに限ったことではなかったようですが、外国の学校なり、子どもたちと交流ができないかということを考えていて、それが今回、ぜひやってみたいということで、連絡を取って、返事をいただいたところです。これから、どんな形でできるか模索していきたいとのこと。

市長

やりたい時が一番大事なので、子どもたちの思いを叶えて欲しい。中身については、顔を覚えましたが程度ではなくて、何かテーマを持ちながらやっていく、その先をどう展開するのかを議論した方が良いでしょう。他のクラスもやりたい、他の学校をどうするなどもあると思います。この学校はこの学校と、この学校はこの学校と、ということもあるかもしれない。目的として英語の勉強なのか、あるいは他のことなのかも含めて、総合的に見たら面白いと思います。

指導主事

伊那小学校でのきっかけは、英語の勉強というところからスタートしています。日本もそうですが、フィンランドも英語がメインではなくて英語を勉強している、同じような状況があるというところから、とりあえず英語を使ってコミュニケーションをとりましょうというところからスタートしています。

教育長職務代理者

市長のたきび通信には、わからないところがあってそのままにしないと書かれています。日本でPISAが注目されたのは各分野において、フィンランドが1位を最初にとったからだと思いますが、私はそんなところでぜひそういうものを知りたいなというふうに思います。

私は行けなかったのですが、フィンランドの本を2冊、3冊読みました。教育を国策として確立したのは1994年、29歳の教育相で、改革を図ったと書かれていました。教育に投資することがフィンランドの未来を切り開いていくことになることから、教育を無料にしていると思います。

また、幕末の戊辰戦争で大変壊滅的となった長岡藩が支藩から米百俵いただいて、藩主はすごく喜んだのですが、小林虎三郎さんは食べてしまえばすぐ無くなる、これを教育に充てるべきとして学校を作り、そこから東大の総長も出る、山本五十六さんもそうですし、優秀な人たちを輩出したということです。伊那市の進徳館も短期間に優秀な人材を輩出したということを見ると、提供いただいている資源を生かさないといけないと思いました。

もう一つ。どうして、わからない子をそのままにしないで行くのか、というのは先ほどありましたけれども、別教室でやることもあると思います。一番は教育実習のときに、そういうことを教わったということです。子ども1人1人を知ることが大切で、教師としてトレーニングを積ん

でいけば見つけられるということで、これは根本だと思います。フィンランドの教育を見てみると、学校へ上がるときに、子どもたちは何をわかっていて、何をわかっていないのかを見る、そこからスタートしているので、わからないところも補うことができる。授業前に補うこともあれば、授業後の場合もある。これは現場でできることで、そういうことに取り組んでいる先生方もいると思いますが、そういうところを考え、ぜひ取り組んでいけたら良いと思います。

フィンランドと日本を比べると、授業時間数は日本の方が多いです。算数、数学についてはほとんど同じです。15歳までの教育課程もほぼ同じ。ちょっと違うのは、フィンランドでは小学校4年生のところで負の数が出てきたり、5年生のところで確率が出てきたりする。その代わり日本では比例や円が無いです。教育課程の考え方の違いはあるが、ほとんど同じことをやっている。でも結果として差が出てきている。一つだけ言えるのは、日本はそういうことに関して、学力調査、いわゆるPISA型の学習をしているので、その力は上がっているけれども、それが本物かというところではない。現場でできそうなこと、ぜひにと思います。

市長

すぐにできないかもしれないが、例えば20人から25人学級は、よく考えれば伊那市にはいっぱいあると思います。小規模校などに先生を1人つけることで、わからない子をわかるまで教えることも可能かなと思います。

教育委員

幼児期の教育はどうでしょうか。小学校に入る前にプレスクールへ行き、大きい子たちとの交わりを持つと聞いたのですが、幼児期はどうですか。

教育長職務代理者

保育園もあります。6歳の時に就学前というのがあり、国の施策で無料、保育園は6歳の時に行ってもいいけれども、そこは有料だからほとんど「就学前」に行く、日本とほとんど同じ流れです。

市長

森の中にある保育園へ行ったが、園庭には大きい木が何本もあつたり、坂道があつたりして、雪が降る中、子どもたちは雪でなくて泥で遊んでいました。外も寒いけれども、それなりの身支度をして、走ったり、ボールを蹴ったりしていた。寒いので中に入るかなと思つたら、これが普通だということでした。保育園の先生も大学卒で、例えば10人の園児がいると、5、6人の先生が見ています。手を出さずに安全な遊びを見守っていると思います。森に行きますよということで、徹底的に森との関わりが普通にあると思います。

教育委員

子どもたちの発達障害、そういったことが結構取り出されていて、学校でも発達に応じた支援を入れて、成り立っているのが現状であり、先生たちはその対応に追われていると思います。例えば、子どもたち同士で喧嘩して、もう行きたくないとなると親への対応が加わり苦労している。何か始めたいのに、その対応に追われ、先生たちが疲れている、そういう現状が日本にはあると思います。

人間の脳の発育について、今の子どもたちは使うべき能力が使われていないようです。それが出来ていないために、本来得られる能力が得られていないのではという研究結果があります。そこに着目して、その能力を伸ばそうという取組はいくつかあります。私が聞いたところでは、例えば九九を空で言えるように詰め込みますが、その場合、イメージする脳が全く働いていないこ

とになる。例えば山は緑に覆われていて空が広がっているという文があるとすると、まず緑に覆われている山のイメージ、そして真っ青な空のイメージが出てくるとと思いますが、そのイメージ無しにそれを覚えることはできないし、そのイメージを司る脳は小さい時にたくさん遊ぶなど原体験から出てくることが多いので、それが足りなくなってしまうとそのイメージが無いために、その上の知識や能力はつけられないこともあるらしく、発達の上で障害になるようです。

フィンランドのように日常の中で森とともにいるというのは、非常に有効であるということです。体を使って子どもたちが遊んでいます。例えば、穴を掘れるのは砂場ぐらいと思いますが、砂場の中に穴を掘り、水入れて、その中の深くまで手を入れると、股関節も曲げて乗り出すことになる。日本の保育園では、危ないのでのぼり棒は無いですが、怪我をしないように、事故がないようにというような環境になっていると思います。

指導主事

先生たちが前向きに子どもたちと向き合っている姿を感じました。日本はどちらかというと委縮の方向へ向かっている。私が初任だった頃から振り返ると、5教科の授業はどんどん増えてきたけれども、技術や家庭科、図工が得意で上手だった子は浮かべられない時間数しかない、危ないからするなという事がどんどん増えてきたと思います。社会基盤であり、どうにもならないけれども、その社会基盤、物の見方、考え方が変わってくれないと、学校で何とか努力してやろうとした時に、何でそんなことするのかという意見が出てきてしまう。それをどうやって地域の皆さん、市の皆さんに理解していただきながら進めていくことが、子どもたちにとって一番良いのか、あるいは学ぼうとする大人にとっていいのか、と思いながら話を伺いました。

市長

先日、知事主催の長野県総合教育会議があり、私も委員としてオンラインで参加しました。その中で、先生の仕事は親の対応に追われていて本来の仕事ができないということを何とかしないと駄目で、先生の中には本当に疲れてしまい、教えるようなことができない先生もおられる、との話がありました。確かに保護者への対応は課題で、保護者からのクレームは学校では受けません、専門の法律に長けた人もいるので、その人が全部受けますのでこちらでどうぞ、ということをしていかないと、ますますエスカレートしてくる時代になると思います。こういうことを研究してみてもと思います。

社会教育指導員

小中一貫校の話がありましたが、一貫校ではない学校もありますか。ある場合、小中一貫と同じレベルでの教育があるか、そのあたりはいかがですか。

指導主事

今回訪問したのは小中一貫校ですが、中学校には他の小学校からも卒業生が来るとのことでした。全てが一貫校ということではなく、単独でやっているところもあるようですが、先生たちの資質は非常に高いという話を聞いています。

市長

学びには差がないと思います。レベルが高いので、わかるまで教えてくれる。そうしたところは学校が違っても差があることは多分ないと思います。

指導主事

人事異動は基本的にはないということです。学校毎に採用する。うちの学校のこういう学びに

ついて、ぜひ必要な人という事で校長先生と市の担当者が面接をして採用するシステムのように。各学校とも大事に考えながら、人材を確保しているようです。

教育次長

いろいろな取り組みがあつて、なかなか新たなことを学校に入れていくことは難しいところがあります。先生たちに新たに何かしてもらふことは難しいと思うので、いい取り組みがあつたら学校側にうまく入っていきけるような仕組みができてくれば良いと思います。例えばこの森のプログラムもそうかもしれないし、他のこともそうかもしれないのですが、学校に取り入れてもらふ、入っていきけるようなことができたなら、先生方の負担もないと思います。

市長

学校登山も同じで、以前は先生たちに経験があり引率して登ったのですが、今の先生で登山の経験がある方は多くない中で、伊那市では学校登山は必ずやろうということで進めていて、1泊泊まりをお願いしています。ガイドをつけて、そのガイドが引率をして、先生も生徒の1人として一緒に行くような感じでも良いと思っています。医師や消防職員もついています。看護師もついているところもあるので、そういうようなサポートでやっていく、同じようなことは、他の場面でもあると思います。森の中のプログラムもインタープリターがサポートしていけば楽しくなると思っています。

教育委員

森と自然と学びについて、学校の抵抗感が出てこないやり方が必要であり、その進め方が大事だと思います。手挙げ式で、この教育のプロフェッショナルになりたいし、フィンランドに自分が行きたいという先生、せっかく伊那市に赴任したのでこの3年間で自費でもフィンランドは1回行ってこようというような先生を募集することも大事だと思います。

市長

向こうとやり取りをして、向こうも教育のことを勉強したり、ヒントをもらったりということをやっている中で、これは現場どうしても行かないという話になれば、行ってもよいと思います。

取組状況では、伊那西小や新山小ではいろいろやっており、楽しいと思います。

教育長

取組状況では、伊那北小や東春近小など既に取り組みがある学校が、自分たちがこう取り組んでいることが出てきていない。自分たちの取り組みをもうちょっと元気よく振り返ってみてもいいかなと思いました。

学校教育課長

お手元の取組状況は、今回、別口の資料として回答を求めている最中で、不十分な資料で申し訳ないです。検討中のところは、後日入れるという状況です。

新山小学校では、教職員についてもぜひフィンランドの視察に参加させていただきたい、そんな思いがあるところもあります。伊那西小学校では、森の自然というのは子どもたちが自分で発見できる大きな課題を提供してくれるとあります。課題を解決していく過程で、本物の結果、そういうところを提供してくれる、AIの時代が来てもやはり森と自然で本物を築き上げることが大切になってくる、等のコメントがあります。長谷中学校では、森林活動や森林の活用、保全、林業そういったものにこの興味や関心を持たせたいという希望はあるけれども、時間的な余白が見つからず歯がゆさを感じているという記載もあるところです。

教育長

この「余白」という使い方は、ある意味当たっている言葉だと感じました。

教育委員

結局どれも片手間になっており、何かを手放さないと次の取組ができないというのがあると思います。先生の立場でそれはできないので、教育委員会としてこちらにシフトしましょうということができるといいと思います。

教育委員

教員は五角形で全部やれる先生になれというのは無理があると思います。五角形でなくて良いので、キャリアが得意な人はキャリアに、フィンランド教育やりたい人は今のものを手放してそれをやれば良いと思います。

市長

これからどういう進め方をするのか具体的に考えていくけれども、そのすべてを学校でやりましょうということは無理なので、できるところから、やりたいところからやっていくということだと思います。学校同士の交流もいいし、先生たちも自主的に集まってフィンランドの勉強会をしたり、向こうの方とメールでやり取りしたり、できることは始めた方がいいと思います。

市長

それでは時間となりました。ありがとうございました。

5 閉会

教育次長

ありがとうございました。次回は3月を予定しております。
以上をもちまして総合教育会議を終了します。お疲れ様でした。